

# インド思想史学会

## 第18回学術大会

### プログラムと発表要旨

開催日：2011年12月17日（土）

会 場：京都大学 楽友会館

京都市左京区吉田二本松町 TEL: 075-753-7603

〒606-8501

京都市左京区吉田本町 京都大学人文科学研究所気付  
インド思想史学会事務局

TEL: 075-753-6949（藤井）/ 2460（横地）/ 6958（梶原）

E-mail: [hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp](mailto:hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp)

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~hit/>

本状は郵便での送付に先立ってメールでも会員の皆さまにお送りしています。本状を添付したメールが届いていない会員の方には、メールアドレスが未登録ですので登録をお願いします（本文にお名前を書いたメールを事務局 [hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp](mailto:hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp) にお送りくださるだけで結構です）。

# インド思想史学会 第18回(2011年度)学術大会のご案内

インド思想史学会会長 井狩彌介

インド思想史学会第18回学術大会を下記の通り開催いたします。  
皆様、どうか万障お繰り合わせの上ご参加ください。

## 記

開催日 2011年12月17日(土)

会場 京都大学 楽友会館 2階 会議・講演室  
(昨年とは場所が違いますのでご注意ください。)

(理事会 11:30 - 12:30 京都大学 楽友会館 2階 会議室5)  
(昨年とは場所が違いますのでご注意ください。)

参加受付 12時30分から 京都大学 楽友会館 2階 会議・講演室前

## 研究発表者および発表題目

13:00 - 13:50 金菱 哲宏(京都大学・博士課程)  
「Yogabhāṣyaに見られる‘svavyaṅjakāñjana’」

13:50 - 14:40 近藤 隼人(東京大学・博士課程)  
「古典サーンキヤ体系における āptavacana の位置づけ  
— Yuktidīpikā を中心に —」

—— 休憩 ——

14:55 - 15:45 池端 惟人(京都大学・非常勤講師)  
「‘Dvaita’ にとっての Sāṃkhya 「二元」 論」

15:45 - 16:35 置田 清和(京都大学・日本学術振興会特別研究員 PD)  
“The Sound of the Fifth Note: A Vaiṣṇava Reinterpretation of  
a *Muktaka* Verse Attributed to Śīlabhaṭṭārikā”

—— 休憩 ——

16:50 - 17:40 松田 和信(佛教大学・教授)  
「スティラマティの俱舍論注釈書 *Tattvārtha* の梵文写本について」

総会 17:40 - 18:00 (発表終了後、引き続き2階 会議・講演室で)

懇親会 18:00 - 20:00 楽友会館 1階 食堂にて

本年度から大会参加費として1,000円を申し受けます(理事会・評議員会にて決定)。  
参加費・懇親会費は当日受付でお払ください。

参加費： 1000円

懇親会費： 3000円

# Yogabhāṣyaに見られる‘svavyaṅjakāñjana’

京都大学大学院文学研究科インド古典学専修博士課程 金菱哲宏

Yogasūtra (Patañjali 著、4-5 世紀。以下 YS) に対する重要な註釈書である Yogabhāṣya (Vyāsa 著、4-5 世紀。以下 YBh) には YS には見られない、‘svavyaṅjakāñjana’ という用語が全体を通して六度使用されている。一番最初に見られるものを例に挙げると、五つの心作用の一つである「想起 (smṛti)」の箇所、潜在印象 (saṃskāra) が記憶を想起させる際にこの svavyaṅjakāñjana が言及される (1.11)。ほかの箇所では、saṃskāra とは別の潜勢力である vāsanā (4.9)、それに煩惱 (kleśa) (2.4) や時間的位相 (lakṣaṇa) (3.13)、そして無尋等至の対象であり全体性を具えたものとしての dharma (1.43) など、様々なものの顕現が説明される際に、この svavyaṅjakāñjana が言及されている。このように様々な場面で、諸々の事物の顕現を解説するのに svavyaṅjakāñjana が援用されているのであるが、Vyāsa 自身はこの語については何も解説することなく周知の用語であるかのように使用しているのである。このことから、svavyaṅjakāñjana が Vyāsa によってなんらかの術語として使用されていた可能性が考えられる。

この語を文字通りに訳すならば「自らを顕現させるものによる顕現」となる。これが言及される各場面に共通しているのは、この svavyaṅjakāñjana が、諸々の対象が顕現してくるのに何らかの補助をなすものであるという点である。その一方で、各場面において顕現される対象に関しては、想起や煩惱、時間的位相などといったような枠組みでは捉え切れない様々な文脈でこの語が使用されており、その置かれる文脈によってこの複合語を構成している各要素、すなわち「自ら (sva)」、「顕現させるもの (vyañjaka)」、「顕現 (añjana)」が指示している対象は違って来るはずであり、この複合語自体の意味・働きも、それぞれの場面で全く同一のものであるとは考えにくい。

では、各場面に共通する相として、この svavyaṅjakāñjana はどのような働きを表しているのだろうか。また、それぞれの文脈ごとでその構成語が指すものが異なっているとすると、どのようなものを対象としているのだろうか。以上のような疑問に解答を与えるため、YBh に対して著された Pātañjalayogaśāstravivarāṇa (Śaṅkara 著、8 世紀頃)、Tattvavaiśāradī (Vācaspatimiśra 著、10 世紀頃)、Yogavārttika (Vijñānabhikṣu 著、16-17 世紀) の 3 つの復注に依拠しながら、この svavyaṅjakāñjana がどのように解釈されているのかを調査し、これらの復注間の解釈の差に留意しながら、「顕現」という作用における svavyaṅjakāñjana の機能と位置づけを整理し、そして YBh でこの語がどのような意味で使用されているかについて考察を行っていく。

## 古典サーンキヤ体系における āptavacana の位置づけ — Yuktidīpikā を中心に —

近藤 隼人 (東京大学大学院)

イーシュヴァラクリシュナ (Īśvarakṛṣṇa, ca. 4–5c.) 著 *Sāṃkhyakārikā* (SK) では、正しい認識手段 (pramāṇa) として知覚 (dṛṣṭa) と推理 (anumāna) に加えて āptavacana が認められている (SK4)。この āptavacana は、“āptaśruti” (SK5d’) ないし “āptāgama” (SK6d’) とも表現されるが、SK 注釈書の多くはこの “āptaśruti” にヴェーダを読み込んでいる。しかし、SK2 ではヴェーダに規定された (ānuśravika) 手立ては苦を滅する手段として究極的でも必然的でもないとして否定されているため、“āptaśruti” にヴェーダを読み込む場合、反ヴェーダ的態度を示すこの SK2 と齟齬を来すことになるが、これは正統バラモン思想との妥協の産物であると考えられている。著者不明の SK 注釈書 *Yuktidīpikā* (ca. 680–720, YD) もその例に漏れず、“āptaśruti” という複合語を ekaśeṣa を通じて解釈することで、人間の知性に基かないヴェーダと人間の知性に基づくスムリティ文献や通士等の言明を同時に読み込んでいる。このような形でヴェーダを読み込むいわば強弁的解釈は、ヴェーダに対する融和的態度がその底流にあると考えられるが、そのような態度は SK2 に対する注釈の中にも見出される。同箇所では、ヴェーダ祭式執行に対する批判を加えながらも、その一方で YD はヴェーダの権威を必ずしも否定するわけではなく、手を尽くしてサーンキヤとヴェーダ主義との折り合いをつけようとしている。

一方、YD はヴェーダに加えて世間的な通達者も āpta として認めていたが、そのような āpta は SK の範たるヴァールシャガニヤ (Vārṣaganya) の *Ṣaṣṭitantra* (ṢT) にまで遡りうる。ṢT の āptavacana 定義からは、その道に通じた斯界の権威であれば āpta として見なされうるため、そこからは āpta に対する比較的寛容な姿勢が読み取れる。その場合、サーンキヤ学派、少なくともヴァールシャガニヤ派は本来 āpta として世間的な通達者を主として念頭に置いていたが、ヴェーダ主義の台頭に伴って SK 注釈書以降、ヴェーダも āptavacana として認めざるをえなくなったという思想史の変遷が想定されうる。そして YD に代表されるように、幾分強引な形で人為でないヴェーダを āptaśruti に読み込む以上、サーンキヤ学派における āpta は本来的には「人」を指していたことが予想される。その予想を裏打ちするかのように、YD はニヤーヤ学派の類比的同定 (upamāna) 批判に際し、類比的同定は āptavacana として成立するという旨を述べるが、その根拠として「特別なる話者に対する依拠」(vaktṛviśeṣāpekṣatva) を挙げている。より具体的に言えば、“agrhyamāṇakāraṇa” という表現から推して、教養文化人 (śiṣṭa) のみならず ārya が āpta の一側面を担っていたと考えられる。

なお、āpta が本来「人」を指すとすれば、サーンキヤ学派の開祖カピラ (Kapila) も āpta に含まれうるのであろうか。聖仙 (ṛṣi) を āpta と見なす YD の記述に照らせば、カピラも āpta に含まれることになる。しかし、サーンキヤ学の根幹を成す精神原理 (puruṣa) や根本原質 (prakṛti)、および三要素 (triguṇa) はカピラでさえも知覚できないと YD では表明されており、その場合、同学派の教理的な意味における āptavacana の位置づけは極めて曖昧なものとなるため、それらの存在論証には学派を超えて適用されうる推論などの論理的思考に依拠せざるをえない。そこからは、プラマーナとしての āptavacana が日常生活を営む上で要請されたものに過ぎないという可能性が浮き彫りになる。換言すれば、āpta にはカピラといった超俗的存在も含まれうるではあろうが、実際には ṢT 定義に見受けられる世間的な通達者が主眼として位置づけられていたことを意味しており、YD はこの ṢT の見解を継承しているといえる。このようにして āptavacana の位置づけを解明する作業は、ヴェーダを中心とする正統バラモン思想圏に対して古典サーンキヤがいかにどの距離感をもって臨んでいたのかを知る上で重要な手がかりを提供してくれるものと考えられる。

## ‘Dvaita’にとっての Saa.mkhya 「二元」論

京都大学 池端惟人

ヴェーダーンタ学派の眼目は数多く存在するウパニシャッドの諸聖句の統一的理解であった。そのウパニシャッドが、個人存在と宇宙根本原理との同一を説き、あるいは二を否定している以上、ヴェーダーンタ学派にとって、サーンキヤの精神 vs 物質の二元論は当然、受け入れられないものであった。その事実、当学派の根本聖典 *Brahmasūtra* が前半のかなりの部分をサーンキヤ学説批判に割いていることから明らかである。また、サーンキヤ説は他学派批判の先頭に置かれ、第一の敵であったことがうかがえる。

このように初期のヴェーダーンタ学派は対サーンキヤの姿勢を強く見せていた。しかし、10世紀以降、同学派がヴィシュヌ教の色合いを強め、*Brahman* 開展説が再び採用されるようになってから事は変わり始める。そして、13世紀 *Madhva* はとうとう *Brahman* と自我と物質を切り分けるまでに至り、それぞれの絶対的な別を説く二元説(*dvaita*)を提唱した。しかし、ヴェーダーンタ学匠である限り、彼も *Brahmasūtra* が目指していた対サーンキヤの路線を貫かねばならなかった。

諸存在間の「二」(*dvaita*)を説く *Madhva* は、サーンキヤの「二元」論に対しどれほどの受容と批判を行ったのか、これを探ることが本発表の目的である。

本発表では、まずサーンキヤ学派がその思想的基盤としたであろうウパニシャッド—*Muṇḍaka* や *Śvetāśvatara* など—を選び、それに対する *Madhva* 派の註釈を見ることで、彼らがサーンキヤ的二元論を自分たちの別異論に利用していることを確認する。

また、ヴェーダーンタ学派にとって聖典の一つと見なされる *Bhagavadgītā* も、サーンキヤ思想の影響を受けた多くの詩節を含んでいる。当該詩節に対する *Madhva* 派の註釈を見ることも、彼らのサーンキヤに対する穏健的態度を探る上で不可欠である。

そして最後に *Brahmasūtra* のサーンキヤ批判部分を検討する。*Brahmasūtra* は、第一章第三篇の後半と第二章第二篇冒頭で、サーンキヤを対論者として想定した議論を行っている。また他学派批判で構成された第二章第三篇の冒頭9スートラをサーンキヤ批判に当てている。これに対する *Madhva* 派の註釈はおよそ原意を得たものとは言い難い。すなわち前者ではコンテキストの読み替えが行われており、スートラ語句を逸脱した解釈を行うことで、サーンキヤ批判の議論を別物にすり替えている。また後者では第一原因(*pradhāna*)を世界の原因とする見解が否定されてはいるものの、その主題は世界原因に精神性があるのか否かであって、サーンキヤ体系そのものに反駁する意思は *Madhva* 派にはなかったと思われる。

以上

The Sound of the Fifth Note:  
A Vaiṣṇava Reinterpretation of a *Muktaka* Verse Attributed to Śīlabhaṭṭārikā

Abstract

*jagannāthasvāmī nayanapathagāmī bhavatu me!* Every summer, thousands of devotees of Kṛṣṇa all over the world march on the street, pulling the cart with the image of Jagannātha. They are emulating the story depicted in the *Bhāgavata Purāna* X. 82, where the *Gopīs* try to take Kṛṣṇa back from Kurukṣetra to Vṛndāvana. This grand festival called *Rathayātrā* originates in the city of Purī, Orissa, where the festival is held annually to this day.

While devotees commonly sing the final line of the *Jagannāthāṣṭaka* to call out for the Lord's mercy, Kṛṣṇa Caitanya, the inaugurator of Gauḍīya Vaiṣṇavism, was singing the following verse as he danced in the same festival five hundred years ago:

*yaḥ kaumāraharaḥ sa eva hi varas tā eva caitrakṣapās  
te commilitamālatīsurabhayaḥ praudhāḥ kadambānilāḥ /  
sā caivāsmi tathāpi tatra suratavyāpāralīlāvidhau  
revārodhasi vetasītārutale cetaḥ samutkaṅṭhate //*

This *Muktaka* verse is attributed to poetess Śīlabhaṭṭārikā. The verse is well known since Mammaṭa discusses it in his celebrated *Kāvya prakāśa* to demonstrate the significance of aesthetic taste (*rasa*) over ornamentation (*alaṅkāra*) in poetry. According to the *Caitanyacaritāmṛta* of Kṛṣṇadāsa Kavirāja, upon hearing the verse sung by Caitanya, Rūpa Gosvāmī, the founding father of Gauḍīya theology, composed the following verse:

*priyaḥ so 'yaṁ kṛṣṇaḥ saḥacari kurukṣetramilitas  
tathāhaṅī sā rādhā tad idam ubhayoḥ saṅgamasukham /  
tathāpy antaḥkheḷanmadhuramuralīpañcamajuṣe  
mano me kālindīpulinavipināya sprḥayati //*

The *Caitanyacaritāmṛta* reports that Caitanya accepted Rūpa as the fit candidate for analyzing the most confidential *rasa* of Rādhā and Kṛṣṇa when he was shown this verse composed by Rūpa.

In this paper, I first portray the meanings and history of the *Rathayātrā* festival as the background of these two verses. Then, in the second part I trace the importance and the role Śīlabhaṭṭārikā's verse plays in the *Alaṅkāra* tradition by examining Mammaṭa's *Kāvya prakāśa*, and its commentaries namely: Narahari Sarasvatīrtha's *Bālacittānurañjanī*, Śrīvatsalāñchana Bhaṭṭācārya's *Sārabodhinī*, Viśvanātha Kavirāja's *Kāvya prakāśadarpaṇa*, and Siddhicandraṅgi's *Kāvya prakāśakhaṇḍa*. Finally, in the third section I explore Rūpa Gosvāmī's understanding or *Śṛṅgārarasa* in his *magnum opus Bhaktirasāmṛtasindhu* and *Ujjvalanīlamanīḥ*, and examine how Rūpa re-interprets Śīlabhaṭṭārikā's verse and the surrounding *Alaṅkāra* tradition in the context of the Gauḍīya Vaiṣṇava tradition.

## ステイラマティの俱舎論注釈書 *Tattvārtha* の梵文写本について

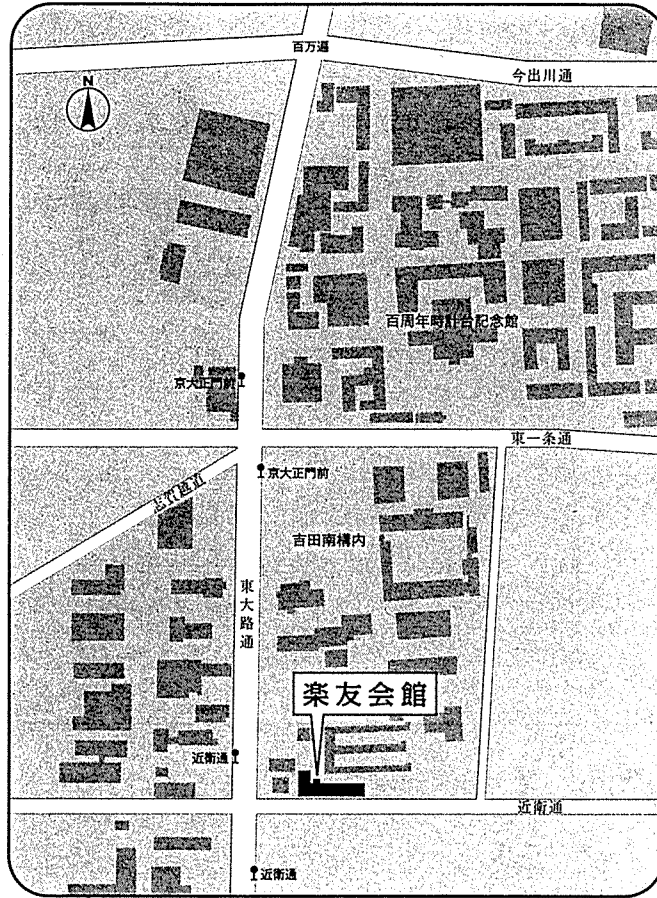
松田 和信 (佛教大学)

1987年にラサのポタラ宮で撮影され、現在は北京の中国蔵学研究中心（中国チベット学研究センター）に保存されている650点ほどの梵文写本写真の中に、ステイラマティの俱舎論注釈書『真実義 (*Tattvārtha*)』が含まれているとの情報に接したのは2005年のことであった。その後届いた写本写真全体の複写を概観して判断すると、『真実義』のテキストは、本来3巻（つまり3束）の巨大な貝葉写本に分けて書写されていたと思われる。しかし、そのうち第1巻（58葉）と第3巻（79葉）は完全な形で保存されているが、中間の第2巻の束は丸ごと失われて存在しない。つまり本写本は2巻で計137葉が残存する不完全な写本であった。そのため、第2巻に書写されていたはずの『俱舎論』第2章「根品」の中ほど（Pradhan first ed., p. 56）より第4章「業品」の中ほど（do., p. 219）までの注釈文（テキスト全体の約三分の一）は失われて現存しない。チベット語訳の奥書によると、『真実義』の翻訳にあたっては、2本の梵文写本が用いられたが、1本は「根品」の中ほどから「業品」の中ほどまでを欠く不完全な写本であったという。つまり本写本は、チベット語訳に用いられた2本のうちの1本そのものであった可能性が高い。またチベット語訳と同様、この写本には『俱舎論』の補章「破我品」の注釈は含まれていないが、これは写本の欠落ではなく、ステイラマティ自身が「破我品」の注釈を著さなかったことによると思われる。写本の書写に用いられた文字は我が国に伝えられた悉曇文字あるいはギルギット・バーミヤン第2型文字と共通する書体で、本写本は恐らくチベットに残る最も古い梵文写本のひとつであり、書体から判断して、書写年代は8世紀中頃、どんなに新しくても9世紀を下ることはないであろう。例えば、書体による年代判定にしばしば言及される文字 'ya' については、ナーガリー系の 'ya' と、グプタ・ブラーフミー系の 'ya' の両方が混在して用いられている。なおこの写本の書体とフォーマットは、かつて私が紹介したカトマンドウの National Archives に保存されているバンドール調査写本に含まれる未知の俱舎論注釈書断簡と全く同じである。

不完全な写本とはいえ、全体の三分の二は残存しており、難読なチベット語訳と敦煌から発見されたわずかな漢訳断簡、および失われた漢訳からの重訳と見なされるウイグル語訳断簡でしか残されていなかった『真実義』の研究、さらには『俱舎論』自体の研究にとって、本写本の価値は計り知れないものがある。本写本は中国蔵学研究中心とオーストリア科学アカデミーの共同研究プロジェクトのひとつに取り上げられ、梵文テキストの出版をめざして、研究を委託された小谷信千代（現在大谷大学名誉教授）を中心に、大谷大学において公開研究会の形を取って、私も参加して解読が続けられている。あまりにも浩瀚な注釈書であるため（少なくともヤショーミトラ疏の2倍の分量がある）、解読はまだ第1章「界品」の半分程度にとどまっているが、写本の外面的状況から言えること、さらにこれまでの解読によって見えてきた『真実義』の内容的特徴について報告する。

# アクセスマップ

市バス「近衛通（このえどおり）」下車 徒歩すぐ



主要鉄道駅	市バス系統	経路	本学までの所要時間	下車バス停
JR/近鉄京都駅から	206系統	「東山通 北大路バスターミナル」行	約30分	近衛通
阪急河原町駅から	201系統	「祇園 百万遍」行	約20分	
	31系統	「東山通 高野・岩倉」行	約20分	
地下鉄烏丸線 烏丸今出川駅から	201系統	「百万遍 祇園」行	約15分	
	206系統	「高野 北大路バスターミナル」行	約20分	
地下鉄東西線 東山駅から	201系統	「百万遍 千本今出川」行	約20分	
	31系統	「東山通 高野・岩倉」行	約20分	
京阪出町柳駅から	201系統	「祇園 みづ」行	約10分	

※交通事情等で延着することがありますのでご了承ください。